

「江戸名物詩狂詩選」の長井兵助齒磨御蔵前に次のように記されている」

肩板太刃正面館 兵助居合上之方
人々待得今將拔 齒入齒磨口上長

●スライド4, 5

長井家は、もと武州岩槻藩の典医で、その家系は源平合戦のとき白髪を染めて出陣したとの話で知られる、長井齊藤別当実盛の末裔とされる。初代兵助は、安永天明のころ江戸に出て浅草蔵前の武蔵野原の草分けとして居を定め、居合拔をして人を集め、齒藥・齒磨の販売と口中療治、齒抜きを行った。後に將軍の御成り御用を勤め、負傷の応急藥として軍中膏といふ膏藥を製造、また八味乳香散の本舗でもあった。当時の長井は、芝の閑安、本郷の兼康、下谷の井口とともに江戸の四張と言われ、なかなかの勢力であった。そのため長井兵助の名をかたって、各地で営業をするものが多く明治17年「開花新聞」にこのような広告を載せている。遠藤為吉は、十四五歳の頃浅草橋、上野広小路、京橋中橋などに長井とまぎらわしい張見世が、かなりあったので父に代わって嚴重徹去させたといふ。スライド5は、その一例でこの広告の出た明治24年には蔵前でまだ開業していない。

●スライド6

長井の姓が遠藤に変わったのは明治14年で、これは当時の徴兵制度によるもので、木津喜も同じく改姓している。

●スライド7

明治19年、入齒口中療営業鑑札を受けてから、日本橋小舟町で開業した。当時の診療所の写真である。

●社会の進展とともにいわゆる従来家は、ともすれば輕視される傾向になってきたので、明治30年5月、医術開業試験に合格、同時に一般従来家の覚醒を促すべく「齒科長交会」を設立、毎週土曜日の夜、齒術研究討論を行い又翌年から機関誌を発刊した。会長に高橋直太郎、自らは副会長となり長井一門に加え2ヶ月後には全国252人となった。

○長井先祖 文政2年正月亡す

○3代目 兵助 嘉永5年8月1日 亡

○4代目 兵助(吉之助) 文久2年9月25日 亡

○5代目 兵助 明治7年7月13日 亡

○6代目 兵助(兼造) 明治18年9月16日 亡

男長 2男 鎌吉

3男 遠藤為吉 昭和17年2.26亡(79歳)
(中原市五郎先生と交際あり)

4男 鉢之助

5男 木津喜重五郎 昭和3年8月12日 亡

長女 なつ 上野風月堂の義姉

→木津喜宏(四男)墨田区向島に開業

自筆「広の歩み」には長井家の先祖のことが書かれてますが若干年代等修正を要するところがあります。長井家の墓は都内浅草小島町龍福院にあります。高橋直太郎先生(文京区小石川)から、遠藤為吉宛昭和9年頃戴いた、在京旧友人の現況を書かれたお便りを5, 6枚持参いたしました。が、時間の都合上次の機会といたします。

15) 軀の浦十一面観音像について

〈第一報〉

The Eleven-Faced Kannon at Jizoin
Tomonoura, Hiroshima Prefecture

東京歯科大学 長谷川正康

Masayasu Hasegawa, Tokyo Dental college

菩薩について

菩薩は、梵語の Bodhi-Sattva (菩提薩埵) の略で、悟りを求める人という意味である。如来の境地に達しようと努力している存在なので、釈迦が出家する以前の王子の姿を形どっている(菩薩部の仏像)。

髪は宝髻に結び、宝冠をいただき、普通は上半身裸体で、左肩から右脇にかけて条帛をまとい、長い天衣を背面から前面へたらし、下半身は裳(裙)をつける。頭飾、胸飾、臂釧、腕釧、瓔珞など多くの飾りをつけている。

菩薩は、一般に温顔である。それは、悟りの境地を求める修業者の立場から当然なことで、自らの修業のかたわら、多くの人びと(衆生)の教

化・救済の誓願を立てているので、民衆にとっては、如来よりの親近感のもてる存在である。日本では、観音、地蔵の両菩薩信仰がとくに厚く、民間の石仏もこの二つが多く造られている。しかし、その他にも多くの菩薩がある。中には、如来の脇侍となる菩薩もある。

観音菩薩（観世音菩薩＝観自在菩薩）

この意味は、衆生が救いを求める声を聞くと自在にこれを救う菩薩ということで、衆生に悟りの法を説く如来に対して、観音は衆生に現世利益の救済を施す存在なのである。大乘仏教の広がった地域で、観音菩薩ほど信仰されている菩薩はない。日本でも飛鳥時代からこの信仰が広まり、造像も盛んに行われた。観音には表1の如く七観音があるが、宗派によって違うようで、真言宗では、不空絹索観音を除き、また、天台宗では、准胝観音を除き、両宗派では六観音である。

通常観音菩薩という場合には、聖観音菩薩を指している。これは、他の変化観音菩薩に対する言葉である。

これら観音は、六道の衆生を教え、救済するのを任としている。六道（六界）とは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天をいう。これらの担当は、地獄＝聖観音、餓鬼＝千手観音、畜生＝馬頭観音、修羅＝准胝観音、人＝十一面観音、天＝如意輪観音といわれている。

十一面観音菩薩（大光普照観世音菩薩）

インド古来の神々や、密教の影響などによって生れたという多面多臂の観音像菩薩像を「変化の観音」とよんでいる。また、三十三化身に姿をかえて、衆生のあらゆる願いにこたえてくれるというヒンズー教 Hinduism（インド教）諸神の影響をうけて、このような多面多臂の観音像が造られたという。

ヒンズー教は、自然崇拜の基本で、ブラフマー Brahṃā 仏教では梵天といい、すべてを育てる神、次にビシュヌ神 Visṇu で、宇宙維持の神とされ、すべてを生む神、そしてシバ神 Śiva で、すべてを破壊する神であるとともに創造神の三神信仰が

中心である。観音の姿（観音の原型）は、このシバ神の侍女の姿から転化したといわれている。

頭上に十一面の仏面を載き、その配置は、前三面を慈悲の菩薩面（慈悲の相）、左三面は忿怒の瞋面（瞋忿の相）、右三面は菩薩に似せ牙を出した狗牙面（白牙上出面相）、後の一面が暴悪大笑の相で、頂上の一面を仏面（仏果を示す阿弥陀仏面）といい、他の十面は、十地を意味し、十一品の無明を断ずるという。

十一面観音の持ち物は、水瓶^{すいびょう}、蓮華を執る他に錫杖を持っている。

水瓶は、比丘^{びく} bhikṣu（僧のこと）が日常生活に使用する十八物の一つで、飲用水を入れる浄瓶と、汚れた処で使用する触瓶とがある。観音の浄瓶は、霊薬を入れ、栓のかわりに蓮華を挿している（蓮華付水蓮）。

これは、シバ神が喉が渴いたとき、侍女が水を差し上げるためいつでも水瓶をもっている。観音の水瓶もこの名残りであると考えられている。

錫杖は、単に杖ともいわれ、これも比丘十八物の一つで、山林を歩くとき蛇や毒虫を避けるための道具で、特に岩座に立ち錫杖を執る像を長谷寺様十一面観音とよんでいる。

このように、多面の顔をなぜ造ったかについては不明の点が多いが、一説によると十一面は、十一煩惱を除去するものと解釈され、煩惱は、数多くあるが代表的なものは十一あるといい、それを除いてくれる菩薩であると信仰するのであるという。

造像として、手は、通常二臂であるが、希に四臂の像もある。

靱町地蔵院の十一面観音像

広島県福山市靱町、靱江ノ浦に位置する小高い丘の中腹眞言宗鶴林山地蔵院（住職山川龍舟師）がある。

地蔵院の縁起は「応永十五年に宥眞法師という有徳の僧が信者の力を借りて中興したと伝えられているが、それ以前の寺歴については不詳とされている。恐らく、創建は鎌倉時代、中興時より二百年余の昔であろうという。時代は移り、寛文の

頃には、この由緒ある寺は、荒廃し、僅かに雨、露を凌ぐほどに落莫したが、深宣という僧侶が再興して昭和50年代まで続いた。現住職山川龍舟師は、中興の祖宥眞法師より数えて三一世に当る。山川師は、本堂の損傷が甚だしいので再建を思い立ち、門信徒の理解と協力によって昭和六十年、立派な現本堂が完成された。地藏院の門信徒のほとんどは、走島町の町民で水上水軍の子孫で、大壇越（大施主）の一人に観光鯛網で名高い村上太郎兵衛氏がいる。

なお、寺宝として伝えられている古文書には、一、徳川將軍家よりの祈禱申付書、一、天正十八年、武田信玄の一族、武田兵部奉納の大磐若経。一、福島正則奉納の両蔓茶羅（金剛界、胎藏界）。一、毛利輝元奉納の唐画涅槃像などがある。

ご本尊は、地藏菩薩で、これにより地藏院の名がある。」と伝承されている。

昭和60年、本堂完成にともない側仏として、納戸に納められていた十一面観音像を安置した。

像は、木彫寄木造り、岩座（43 cm）上の立像で、円光背付、像高 148 cm、肩幅 27 cm、右後方に錫杖を立て、左手には蓮華付水瓶を握っている。頭上化物十一面は完存し、額中央に白毫を嵌め、眼には玉眼を入れ、温顔で笑みを湛えている。特徴あるのは口元で、口唇が開き、上顎中切歯2本が見えることである。すなわち「歯相が認められることである。

なお、脇侍は右が不動明王で、左は毘沙門天である。眞言宗派では、右が不動明王で、左は愛染明王が普通であるが、軀、浦周辺の眞言宗派の寺では、地藏院の配置と同じである。

歯吹如来像との比較について

昭和51年5月23日、第4回日本歯科医史学会総会において、「歯吹如来造像の疑問点について」と題して、歯相が特に認められる阿弥陀如来について、その造像上の問題点を解明した。

その際、造像上の特徴として

1. 歯相の表現（把富喜・歯吹）
2. 仏足文（千輻輪相）・憂喜安志、浮足
3. 立像において足裏に衾をつくらず、別に金

属の支柱を裾底に立てる。

の3つの共通する特長がみられた。

このような把富喜如来、憂喜安志の尊像にみられる表現は、応身仏の具えた三十二種の優れた相好、すなわち、三十二相をでき得る限り表現しようと努めた像である。

したがって、地藏院十一面観音菩薩は、歯相のみ見られるのみで、他の特徴がみられない。現在、このような歯相のみられる観音菩薩が他にもあるか、また、歯相のみを現わしたのは、なぜかについて調査中である。

16) 風流今様曾我について（その2）

Furyuimayosoga (Part 2)

東京医科歯科大学 本山佐太郎

Sataro Motoyama, Tokyo Medical and Dental University

1. 東京医科歯科大学所蔵：

「風流今様曾我」に所載されている「御歯薬」の看板のある見世が画かれている挿絵は、貞享、元禄（1684-1704）頃に描かれた風俗画とほぼ断定した事は「前回の日本歯科医史学会（第16回学術大会）」で報告した。

今回は“この場所が何処であるのか”を述べてみたい。

四之巻一冊のみの零本で……本文は僅か七丁、十四頁の限られた紙面から場所と思われる箇所を抽出してみると

- イ）鬼助兄弟竹町のしまい物や
- ロ）並木の茶やに立入り、酒をのんで遊び居たり
- ハ）早ばやに山を出るか
- ニ）山にて毎月出合ます
- ホ）山もさみしゅう

以上から京都、浪速ではなくて江戸の市中と推定される。

2. 享保20年（1735）版「続江戸砂子温故名跡誌」巻之二

- 1）並木町……浅草寺の大門先也。両がは料理